様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４７８９

研究課題名（和文）高等学校国語科における論理論証教育の実践モデル，学習評価モデルの開発

研究課題名（英文）Development of logical education practice model and evaluation model in secondary school Japanese curriculum

研究代表者
宮本　浩治（MIYAMOTO, Koji）

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：３０５８３２０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，高等学校の論理論証教育の実践モデル，学習評価のモデルを開発することである。とりわけ，説明的文章を読むことの学習を中心として，理解と表現の関連指導のあり方に関する研究を行った。研究協力者と協働して，論証を扱う先駆的な取り組みの内実を明らかにしつつ，授業を構想し，授業を実践した。そして，授業の観察と分析を通して，授業モデルとして類型化し，有効性を確かめることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果としては，論証を扱う授業を構想し，実践し，観察と分析を通して，授業モデルとして類型化することができた点である。類型化にあたっては，論理的思考力・表現力の育成を観点として，具体的な教材開発の視座から検証し，授業モデルを支えるデザインマップを構築できた点も成果として挙げられる。とりわけ，研究組織としては，当初の予定どおり，多くの実践者に研究協力者となってもらい，共同して研究開発を行うことができた。このことが，実践に適用可能な形での授業モデルの開発を促進した。
ただし，学習評価モデルの開発という面では，課題が残る。言語パフォーマンスに着目した学習と評価を統合した開発が求められる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a practical model for logical reasoning education and a model for learning evaluation in secondary school Japanese curriculum. In particular, we studied about the instructional models of argument in reading comprehension connected with writing In collaboration with research collaborators, we designed the lesson while clarifying the reality of the pioneering approach to dealing with argumentation. Through observation and analysis of the lessons, we were able to categorize into some lesson models and confirm their effectiveness.

研究分野：国語科教育

キーワード：高等学校国語科　論理論証教育　実践モデルの整理・分析　単元開発の構想　主体形成　学力評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在の国語科教育実践においては，理解力と表現力が切り離されたものとして認識され，読解を重視する教育活動が展開されている。学習指導要領の記述を見ても,「正確に理解する」「的確に理解する」という文言に示されるとおり,「読解」を中心とする，明示されている情報の「読み取り」を学力として位置付けようとする信念（学力観）は，国語科教育実践のあり方を制限し，その内実を規定してきた。

しかしながら，言語理解と表現を「リテラシー」という概念で統合する，PISA などに見られる国際的な学力調査は,「読解」に終始する国語学習の課題を浮き彫りにした。また，毎年実施される全国学力・学習状況調査においても,「判断の根拠や理由を明確にして自分の考えを明示していく」ことに関しては，依然として課題があることが指摘されており，国語学習の抱える課題はより明確化されてきたと言ってもよい。

このことは，子ども側の能力の問題として把握されるべきものではない。むしろ，教える側の教員の意識の問題として認識されるべきものである。たとえば，主体的な学びを促す指導について，教員側の意識を調査した TALIS 調査において，批判的思考を促すことを指導している教員の割合は 15.8%であり，世界平均 80.3%に遠く及ばない現状があることも明らかになっている。

こうした事実は，学校における授業，国語学習の現実として現象化することになり，結果として子どもたちの「読解力」は狭い範囲でしか育成されず，把握されないことになる。現実の教室に現象化した高等学校における論理論証教育の課題は，およそ以下の３点に集約することができる。

①教材の内容的側面にばかり傾倒し，結果的に論証過程に対する分析がないがしろにされたままにあること。
②論理的表現や思考を構成する要素を学年が上がるにしたがって身に付けられるわけでもなく，また，自然に発達するわけでもないにもかかわらず，系統性を意識できないだけでなく，系統化の観点さえも明確化できないこと。
③論理の内実の把握が明確でないまま，狭義の因果関係や因果的思考として捉えられない傾向が存在しており，論理的表現や思考としての位置付けが十分になされていないこと。

子どもが身に付けた力の実際，そして教員の指導の意識の実態から現在の国語教育実践の事実を捉え直しても，論理的表現力・思考力の育成についての現状を検討してみた結果は，テキストにある記述をもとにして，根拠や理由を明確にして、自分なりに表現していくこと，論理的に思考し，表現していく力の育成という意味においては，課題が存在したままの状況に変わりはないことは明らかである。

こうした課題状況の認識のもと，学習指導要領は改訂され,「思考力・判断力・表現力」の育成を主眼として，とりわけ，国語科においては,「思考力（中略）とは，言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力（学習指導要領国語編，平成 21 年告示)」と明記され，言葉により論理的に思考し，表現する力の育成が求められてきた。また，平成 30 年告示の学習指導要領では,「育成すべき資質・能力の三つの柱」として,「思考力・判断力・表現力」が位置付けられた上，論理的に思考し，表現する力の育成については，これまで以上に重要な要素となっている。さらに，高等学校国語科では,「論理国語」という科目が新設されることとなり，論理的思考力と表現力の育成の充実が求められることになった。

こうした流れの中で，高等学校段階のゴール段階で求められる「論理論証教育」の目標や内容，そして論理論証教育の実を上げるための授業論について明示し，学習モデルとして提示していくことが，これからの社会を生き抜く子どもたちの能力形成の観点から，また，教員の学習指導開発の観点からも求められることであると結論付けられる。

２．研究の目的

本研究の目的は，高等学校国語科における論理論証教育の実践モデル，学習評価モデルを開発することにある。具体的には，論理や論理的思考力の内実について定義しつつ，高等学校修了段階で育成すべき論理的思考力の内実を策定し，基本的なカリキュラム開発の観点を創出するとともに，論理論証教育の目標を効果的に達成するための方法論的原理を分析し，実際に試行し，修正していくことによって，授業モデルを開発すること，そして学習評価モデルを開発することにある。

具体的には，以下の３つの研究課題を明らかにする。

① 論理論証教育を軸としたカリキュラム開発を行っていくために，まずは既存の教科書に掲載された評論文・論説文教材の特性を把握するとともに，こうした教材群を用いた授業実践の具体の検証を行い，育成が想定されている論理的表現力や思考力の内実を明らかにするとともに，論理的表現力・思考力の育成に向けて目指すべき方向性を策定した上で，教材開発に基づく単元開発を行う。

② 国立教育政策研究所が示した論理的思考力の育成のための６つの活動（『特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果－21 世紀グローバル社会における論理的に思考する力の育成を目指して－』，2013，p.9）に，「＋１」の活動として，＜思考の過程を適切に批評する＞活動をメタ領域として位置付けた上で，この＜6＋1＞の活動に相即させていくことで，教材開発の視座を示しつつ，授業モデルの構築を行う。研究過程で，この活動領域自体の検討も行うが，「＋１」として「思考過程を適切に批評する」活動を位置づける意味は，読むという行為自体を捉え直し，

③ 上記の作業を通じて明らかになった論理的表現力・思考力の育成の系統性や教材開発の視座をもとにして，授業モデル支える授業デザインマップを作成し，実際に授業実践を行った上で検証し，適応可能な実践理論の構築を行うとともに，学習評価の指標を作成する。

３．研究の方法

大きく３つの研究課題の解明を行うため，３つのプロジェクトを立ち上げた上で，次の手順で研究を進める。

・プロジェクト①：論理的表現力・思考力育成のために行ってきたことの省察
主として，研究協力者の国語科教育実践の展開を振り返りながら，具体的に論理や論理的思考力の定義について確認していく。また，先行研究や研究協力者の認識をもとにして，論理的思考力の内実についての概念規定の達成水準を確認し，統合した上で，論理観や目指すべき論理的思考力の内実の概念規定と形成を目指す。

・プロジェクト②：既存の教科書における教材特性の把握と教材開発の視点の共有
既存の教科書に掲載されている評論文・論説文教材を列挙し，これらの教材特性を把握し，教科書レベルで意識されている論理的思考の内実について明らかにするとともに，プロジェクト②の成果とプロジェクト①の検討を通じた成果とを統合し，単元や教材開発の視点を共有する。

・プロジェクト③：教材開発，単元開発と，その検証を通じた学習モデルの構築
論理論証教育の詳細，ロードマップ作成プロジェクトを立ち上げ，プロジェクト①とプロジェクト②の議論をもとにして，高等学校論理教育カリキュラムの詳細を作成するとともに，効力があり，無理なく実行できる系統的な単元開発を行いつつ，ロードマップを作成する。

１年次から，論理的思考の内実の概念規定を徹底して行い，論理及び論理的思考，また論理論証教育の目標についての定義付けを行い，高等学校段階での学力形成の系統性を担保するための作業を行う。また，全体目標を設定しつつ，下位目標についても議論を行い，その内実を把握し，設定する。研究方法としては，インタビューやカンファレンスの内容を録音し，キーワードや特徴的な対話を取り上げる。

２年次には，目標と方法を系統化したカリキュラムを開発し，授業モデルを構築し，その一部を施行して評価し，修正して，精度の高い論理論証教育のカリキュラム，授業実践モデルの開発を行う。研究方法としては，授業場面の記録と授業実践後のインタビューによる。

３年次は，実効性の高い授業実践モデルの提示のために，授業モデル自体のブラッシュアップを行う。学習者の学力形成と教師の授業改善の二側面からの検討を行い，授業モデルと学習評価モデルを抽出し，「理論と実践を融合する中間理論」を形成する。研究方法としては，プロトコル分析，とりわけ学習者の記述した反応の変容の分析と，授業プロトコルの分析を通じた改定による。

４．研究成果

本研究では，高等学校の論理論証教育の実践モデル，学習評価のモデルを開発することである。とりわけ，説明的文章を読むことの学習を中心として，理解と表現の関連指導のあり方に関する研究を行った。研究協力者と協働して，論証を扱う先駆的な取り組みの内実を明らかにしつつ，授業を構想し，授業を実践し，検証を行いつつ，修正を行った。３年間の研究の成果として，以下の点を実現できた。

（１）教材開発の視座の獲得

まずは，既存の教科書所収の教材をもとにして検討を行った。その結果，テーマの難易度と教材に使われている言葉やタームの難易度を観点として，教材の採択が決定されているだけの

状況を明らかにした。
　ただし，検討した教材の多くが，実際にこれまで扱ってきた教材であること，そして教材としての勘所を心得ている教材であることもあり，定番的に扱われてきた教材群を簡単に否定することは難しいことも合意された。
　慣れ親しんだ教材群を，論理論証の系統性を観点として，位置付け直しのための組み合わせの基準（下記参照）を作成したことは成果の１つであり，実際に使ってきた教材を位置付け直す基準としても実効であったという点でも特記すべきことである。

出来事性	原理・枠組み	理由付け	説明方法
エピソード（体験・経験）	法則性	科学的法則・法律	一般化
現実生活	経緯の説明	類似	レトリック
学術世界	原理・原則	一般化・権威	筆者独自の見方・枠組み
思想世界	思想性	因果	学問的蓋然性

（２）学習モデルの開発

　また，授業の観察と分析を通して，授業モデルを類型化して示すことができ，なおかつその有効性を確かめることができた。類型化にあたっては，論理的思考力・表現力の育成を観点として，具体的な教材開発の視座から検証し，授業モデルを支えるデザインマップを，学習者の学力形成の実態と相即する形で，構築できた点も成果として挙げられる。
　たとえば,「筆者の論証過程を図式化し，説得の技法自体を捉え直し，モデル化しようとするもの」を「抽出型」として位置付けた。論証のあり方が十分に理解できていない学習者に対して，論理的表現のためのモデルを提示し理解させることを目指した学習としては，高等学校入門期の学習に位置付くものであり，系統的な学習を目論む上での重要性と合わせて言及できたことが大きな成果であった。
　ほかにも,「同種の内容の文章について，論証等の差異を観点として検証し，学習者の批評を促進し，学習者自身が自分の考えを形成する」段階の学習については「比較・反応型」,「根拠と主張の間にズレがあり，このズレを埋め合わせる推論を促進するもの」を「補足型」と位置付けることができ，学習者の学力形成の実態に合わせた活用ができる形で明示することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 篠崎祐介・青木幹昌	４．巻 19（1）
２．論文標題 『学び合い』授業における教室談話に関する事例研究―説明的文章の協同的読解場面に焦点を当てて―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 臨床教科教育学会誌	６．最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 幸坂 健太郎	４．巻 61巻2号
２．論文標題 論説・評論を 「自分と結びつける」 ことの概念区分―高校生を対象としたインタビューの分析に基づいて―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 読書科学	６．最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.61.2_77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 幾田伸司・宮本浩治・金子　萌・守田庸一	４．巻 33
２．論文標題 テキストの二重構造に着目した説明的文章教材分析の観点	５．発行年 2019年
３．雑誌名 語文と教育	６．最初と最後の頁 30-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮本浩治	４．巻 42－4
２．論文標題 教科教育研究と教師教育実践，そして教師教育研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本教科教育学会誌	６．最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 篠崎祐介・青木幹昌	4．巻 18
2．論文標題 書写における低学年児童の相互評価に関する研究―主体的・対話的な学びによる授業実践を通して	5．発行年 2018年
3．雑誌名 臨床教科教育学会誌	6．最初と最後の頁 19－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波博孝	4．巻 18
2．論文標題 児童の言語生態研究会（児言態）理論と国語（母語）教育諸理論の統合試論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 児童の言語生態研究	6．最初と最後の頁 36－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波博孝	4．巻 37（11）
2．論文標題 国語教育研究に必要な語彙力 ： 国語教育研究の世界に入るための関門として	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 42－49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波博孝	4．巻 67（8）
2．論文標題 「新しい実在論」と第三項理論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 18－29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青山之典	4．巻 9
2．論文標題 「説明的文章の難易度を決める要因（3）　ー小学校と中学校の国語教科書を比較してー」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報	6．最初と最後の頁 1－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川芳則	4．巻 35
2．論文標題 説明的文章の批判的読みの授業づくりの要諦	5．発行年 2018年
3．雑誌名 言語表現研究	6．最初と最後の頁 1－10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川芳則	4．巻 38（3）
2．論文標題 書くことの実態を踏まえる、つまずきを取り除く	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 12－22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川芳則	4．巻 561
2．論文標題 多様なテクストを論理的に活用するための精選された内容として	5．発行年 2018年
3．雑誌名 月刊国語教育研究	6．最初と最後の頁 28－31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川芳則	4．巻 1209
2．論文標題 批判的読み（クリティカル・リーディング）で『見方・考え方』を鍛える	5．発行年 2018年
3．雑誌名 学校教育	6．最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川芳則	4．巻 34
2．論文標題 説明的文章を批判的に読む授業を行うための初期段階の実践課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 言語表現研究	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青山之典	4．巻 8
2．論文標題 説明的文章の難易度を決める要因(2)ー根拠の構造に焦点をあててー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 幸坂健太郎	4．巻 1
2．論文標題 論理的な文章を書くことと「わたしレポート」―〈自分ごと〉として書く学習者を育てるために―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 田中宏幸先生御退官記念論文集	6．最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 篠崎祐介・青木幹昌
2．発表標題 国語科の論理的思考力育成における主張の把握の位置づけの検討
3．学会等名 第137回全国大学国語教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 宮本浩治
2．発表標題 論理的表現力・思考力を育むためのカリキュラム開発
3．学会等名 日本教育実践学会　第22回研究大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 宮本浩治
2．発表標題 教科教育研究と教科教育実践と教科教育研究
3．学会等名 日本教科教育学会　第45回全国大会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 難波博孝
2．発表標題 根っこを育てる国語教育－第三項理論と児言態理論－
3．学会等名 第136回全国大学国語教育学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 篠崎祐介・青木幹昌
２．発表標題 説明的文章の協同的読解に関する実践的研究
３．学会等名 第135回全国大学国語教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮本浩治
２．発表標題 論理論証教育における学習開発
３．学会等名 日本教育実践学会第21回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉川芳則
２．発表標題 説明的文章の批判的よみの学習指導過程構築の観点
３．学会等名 第134回全国大学国語教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 難波博孝
２．発表標題 中国語圏における中等国語教育の現状
３．学会等名 第134回全国大学国語教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 宮本浩治・難波博孝・篠崎祐介・幸坂健太郎・吉川芳則・青山之典
２．発表標題 小中高の論理教育カリキュラム策定のための基礎研究（１）―理論的枠組みの構築
３．学会等名 第132回全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 篠崎祐介・青山之典・吉川芳則・幸坂健太郎・難波博孝・宮本浩治
２．発表標題 小中高の論理教育カリキュラム策定のための基礎的研究（２）―実態調査
３．学会等名 第132回全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉川芳則
２．発表標題 批判的読みの学習活動の開発に資する説明的文章教材の特性把握の観点
３．学会等名 第132回全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 青山之典
２．発表標題 説明的文章教材の難易度を決める要因(2)ー根拠の構造に焦点をあててー
３．学会等名 第132回全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 幸坂健太郎
２．発表標題 論説・評論の読みにおける〈自分ごと〉認識の理論的検討―中等国語科で育成を目指す資質・能力を踏まえて―
３．学会等名 第132回全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 幸坂健太郎・難波健悟
２．発表標題 論説・評論の読みの指導でいかに学習者の〈自分ごと〉認識を引き出すか―高校１年生を対象とした実践―
３．学会等名 第133回全国大学国語教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 宮本浩治
２．発表標題 高等学校国語科における論理論証教育の学習モデルの開発
３．学会等名 日本教育実践学会第20回研究大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計7件

１．著者名 吉川芳則編著・明石市立朝霧小学校著	４．発行年 2019年
２．出版社 明治図書	５．総ページ数 128
３．書名 インタビュー・スピーチ・プレゼン・話し合いの力をつける！小学校国語科話すこと・聞くことの活動アイデア44	

１．著者名 全国大学国語教育学会編（分担執筆）（本科研関係執筆者：吉川芳則・幸坂健太郎）	４．発行年 2019年
２．出版社 東洋館出版社	５．総ページ数 202
３．書名 新たな時代の学びを創る小学校国語科教育研究	

１．著者名 全国大学国語教育学会編（分担執筆）（本科研関係執筆者：宮本浩治・青山之典・篠崎祐介）	４．発行年 2019年
２．出版社 東洋館出版社	５．総ページ数 266
３．書名 新たな時代の学びを創る中学校高等学校国語科教育研究	

１．著者名 日本教科教育学会編（分担執筆）（本科研関係執筆者：吉川芳則）	４．発行年 2020年
２．出版社 教育出版	５．総ページ数 192
３．書名 教科とその本質―各教科は何を目指し、どのように構成するのか―	

１．著者名 吉川芳則	４．発行年 2018年
２．出版社 明治図書	５．総ページ数 144
３．書名 国語嫌いな生徒が変わる！中学校国語科つまずき対応の授業＆評価プラン	

１．著者名 難波博孝	４．発行年 2018年
２．出版社 明治図書	５．総ページ数 128
３．書名 ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業 ―国語科で論理力を育てる―	

１．著者名 吉川芳則	４．発行年 2017年
２．出版社 明治図書	５．総ページ数 160
３．書名 論理的思考力を育てる！批判的読み（クリティカル・リーディング）の授業づくり ―説明的文章の指導が変わる理論と方法―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	難波　博孝 (NANBA Hirotaka) (30244536)	広島大学・教育学研究科・教授 (15401)	
研究分担者	青山　之典 (AOYAMA Yukinori) (00707945)	福岡教育大学・大学院教育学研究科・教授 (17101)	
研究分担者	吉川　芳則 (KIKKAWA Yoshinori) (70432581)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	幸坂　健太郎 (KOSAKA Kentro) (20735253)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
研究分担者	篠崎　祐介 (SHINOZAKI Yusuke) (60759992)	玉川大学・文学部・助教 (32639)	